

2018. 12. 11 (火)

あるべき「ペットと人間の関係」を求めて

奥野卓司

関西学院大学での日々

今日は、最終チャペルとなっています。今年、社会学部で定年退職させていただくのは、そちらにおられる宣教師のグルーベル (Grubel) 先生と私です。

打樋先生から、勤続22年とおっしゃっていただきましたが、1997年に関西学院に来させていただきました。その前は甲南大学というところにいました。

皆さんはまだ生まれていないか、生まれたところかと思いますが、1995年に阪神大震災があり、震災では、関西学院大学でも甲南大学でも、たくさんの学生さんが亡くなってしまいました。ただ、建物被害は甲南大学のほうが大きかったです。この辺りの周辺の方も含め、神戸、芦屋、西宮、尼崎では、皆そこから、大変つらい思いをしました。2年後に、甲南大学も復旧のめどは立ち、僕は97年に関西学院に来ることができました。

僕自身はキリスト者ではありませんが、勤務年間で、関西学院およびキリスト教の方々に大変お世話になり、心から感謝しています。

キリスト者ではないとはいうものの、大学教員になる前は放送作家をしていて、京都 YMCA の番組を作ったり、京都 YMCA で

教えていたりもしたのですが、それも含めると自分の人生の大半がキリスト教に関わっていたなあと思い出しています。

関西学院大学で担当してきた科目名は変わりましたが、メディア系の科目をずっと担当してきました。難波学部長に来ていただいていますけれども、就任当時は関学社会学部のメディア系は、メディア系とも情報系とも言っていないで、マスコミ系と呼んでいましたが、放送や新聞、そして今、難波先生が担当されている広告など、マスコミの各分野に対応した形でそれぞれ著名な研究者がおられました。ここで、インターネットに関する講義を担当したのは私が初めてだったので、今はメディア系というとインターネット系の先生方がほとんどですが、それからみてもこの20年間に、社会が大きく変わり、それに対応して学部の構成も変わってきたなあと感じています。

動物と文化の関係

このように講義担当してきたのはメディア系でしたが、研究としては、キリスト教と文化研究センターでも共同研究をさせていただいたのですが、動物と各文化の関係、つまりそれぞれの宗教にとって動物観はどう同

じでどう異なるのか、ということもやってきました。

というのは、大学では修士課程まで生物学を専攻していました。その頃から各家畜の起源を求めて、文化人類学的な調査をしていて、並行して放送作家だったので、放送番組でも動物の生態、動物園の番組などを主に制作してきたんです。その延長で、関学ではメディア系の授業をしながら、ずっと動物と文化の関係ということを考えてきました。

このテーマは各文化のもとになっている宗教、人間の信仰に深く関係しています。キリスト教社会は、単純化すると牧畜社会の中で生まれてきたと言えます。また、日本の社会は基本的には農耕社会でした。研究の世界では、現在はすでに日本が農耕社会、西欧が牧畜社会だという認識自体が間違っていることに至っていますが、従来は、柳田國男以来、民俗学や文化人類学では、日本を稲作文化としてきたわけで、それは大きく文化をとらえるときには間違っていないでしょう。

もちろん今は、このようにして、幸いにも日本ではそれぞれ宗教を認め合う形になって、皆さん方も、キリスト者の方もいるし、そうでない人たちもいるし、それぞれの信仰はいろいろあるわけです。日本の場合は昔から宗教について非常に曖昧な部分が多いですが、しかし、動物に対する考え方では宗教的・心性の違いが大きく表れています。

宗教による動物観の違い

たとえば、この間、関西学院では教職員で「人と動物の共生を考える会」というのをやってきました。その会をつくった動機は、キャンパスに、今でいえばコミュニティーキャット、ユニバーシティ・キャットですが、当時は「野良猫」が多数いました。この呼び方の変化も面白いと思います。つまり、自分の飼っていた猫を大学に捨てにくる人が多かったのです。猫たちは学生が食べ物をやってくれるので生きてはいけるけれども、猫の好きな教職員からすれば、このままではよくないと考えて、これらの捨て猫に避妊手術をして餌をやることになりました。

このことで学内では意見が分かれました。避妊手術をすることが猫にとって本当にいいのかどうかという日本独特の考えさえ主張されていました。

また、「神戸新聞」などで、教職員のこの活動が「美談」として掲載されたのですが、それをみて、猫を飼うのに困った学外の人たちが、自分の猫を育ててもらおうとここへ持って来たので、大学から善意の教員たちが怒られたわけです。この活動をしてきた教職員たちしてみると、猫をきちんと育てるために避妊手術をして、その増えない猫に餌をやっていたわけなのですが、大学の立場とすれば野良猫が徘徊するのは困るというのわかりますね。

今でもこうした考え方の違いはよく起こります。たとえば、兵庫県は「NO KILL」という方針を打ち出しています。つまり不要にされた犬や猫を、行政は殺処分しないということです。

飼い主が犬や猫が飼えない状態になると保

健所にもっていきますよね。たぶんこの人たちは、保健所に連れて行けば、誰か次の人が飼ってくれるだろうと思って持って行くわけです。たしかにインターネットでその犬、猫を1週間ほど掲示して、その間に引き取り手が現れれば、その方にその犬や猫を引き渡すことを基本的にはしてきたことになっています。でも、今もし仮に皆さんが、それぞれの区の保健所に自分の飼い犬や飼い猫をもっていくって、兵庫県では受け取りません。なぜかという「NO KILL」という方針を行っているからです。

これはおかしいではないかと思われるかもしれません。つまり動物を殺さないと言っているわけですよね。動物を殺さないと言っているながら、皆さんが助けてくださいと言っている動物は受け取らないということですから。

なぜこうなのかというと、ペットは、インターネットで掲示してもほとんど引き取られることはないからです。その場合は、1週間たてば彼らは殺処分されてきました。

これがどんなにひどいことか、実際に体験しないと分からないので、犬や猫を飼っている人でも見たことがない人が大部分なのですが、そういう悲惨なことになります。国や県としては、こうした殺処分はもうやめたいという方針を採りはじめていますので、結果的に保険所では飼い犬や猫を受け取らないということになりました。

ペットと人間の関係の問題

今、猫ブームだといわれていますし、皆さんも、たぶん猫ブームだと思っていると思います。これも実は、そういう意味では、僕自

身も動物の番組を作ってきたので責任がありますが、マスコミが作った話です。

一時、犬は日本全国で大体1,500万頭飼われていました。今は確かに猫のほうが犬より数は多いです。犬を飼う人がそれだけ減ったということです。900万頭を切っています。猫のほうは大体同じ数がつづいているのですが、本当は犬が減ったから猫の数がそれを抜いただけです。

また、ペット業者というものが、この間のブームで生まれてしまいました。僕が子供の頃はペット店なんてありませんでした。それぞれ犬や猫は自分の家で飼っていて、その犬や猫が生んだ子どもを近隣の人がもらって育てていました。小鳥の販売店がペット店にかわってから、子犬を買ってきて部屋の中で飼うということが始まったわけです。ところが、各家庭の子供の数が減ったために、子犬を買うという人が減ったので、猫が増えてるように見せなければ商売にならないので、今はさかんに「猫が多くなっている」「猫はかわいい」という雰囲気を出しているわけです。

ところが現実の今の家庭では、自分の子どもに、動物に触れさせるのをむしろ嫌がります。学校ですらそうです。今は実際に日常的に動物に触れて育った子どもは少ないです。皆さんの多くの方がそうでしょう。

僕が小中学生だった時には、学校にニワトリやウサギなど、いろいろいました。でも今は学校がそういうことをしてはいけないことになっているのです。これにも、人畜感染症の危険などの正当な理由があるし、僕も研究者としてはそれはそれで認めます。しかし一方では、子供が生き物に触れない社会というのはやはりおかしいのではないかと、思うわ

けです。

そういう世の中で、今、犬や猫を飼っている中心は、ぼくのような高齢者です。そして昔は、猫や犬は飼われていても外にいましたが、今は部屋の中で飼うことが当たり前になり、私たちもそれを主張してきました。そうすることで、犬や猫が、飼い主以外の人に迷惑を変えないし、お互いにけんかをせず、病気にもならないからです。実際、今の犬や猫は長生きします。だが、そうになると、今度は私たちも年をとって高齢者になり、高齢者が高齢犬や高齢猫の世話をしているということになってきています。そして、飼い主が介護が必要な状態になると、犬や猫を飼うのに非常に困って保健所に持っていくしかないことになります。

しかし、やはり県や政府としては「NO KILL」、殺処分ゼロを目指していますので、この正しい目標と、現実とで矛盾が起ってしまうのです。

「NO KILL」が社会的基準となってきた背景は、やはり宗教というものを考えなくては いけません。それぞれに文化にはその根にその民族の宗教観があります。宗教観は、その民族での動物とのつき合い方、動物の死生観とつながっています。日本は今 SDGs をはじめとして、キリスト教を基礎にしている西欧の考え方に基準をおこうとしています。それは正しいのだけれど、政策的にはそれに近づけようとして、これまでの動物との付き合い方の現実との間に乖離（かいり）が起っているのです。

これをどう解決すべきかという回答は私からは申しませんので、今日はこういう問題があるのだということだけ申し上げて、最終チャペルとさせていただきます。皆さんに生き物の命、つき合い方について考えていただけると大変ありがたいと思います。

(社会学部教授)